



令和元年度 琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展

# いまとむかしの中城

～琉球大学資料にみる自然・文化・人～



琉球大学  
UNIVERSITY OF THE RYUKYUS

## いまとむかしの中城

### ～琉球大学資料にみる自然・文化・人～

赤嶺 守（琉球大学名誉教授・名桜大学大学院教授）

琉球大学附属図書館は1950（昭和25）年の開館以来、多くの沖縄関係の貴重資料を収集してきた。そうした貴重資料を広く公開すべく2002（平成14）年度から学外貴重書展を開催し、2016（平成26）年度には博物館（風樹館）との合同企画展として名称を「学外企画展」に改め、これまでに学外貴重書展を13回、学外企画展を5回開催している。今回、第6回目の学外企画展を中城村護佐丸歴史資料図書館で開催することになった。

今回の企画展は「中城の歴史と自然」「暮らし・民俗」「移民」「琉球大学と中城村」の4つのテーマで構成されている。「日本の城ランキング2018」では6位に選ばれ、アーチ型の門そして太平洋・東シナ海を眺望できる壮大な規模を誇る中城城跡、生命力あふれる植物の群生する中城の森の中には、オリオオコウモリやワタセジネズミなどの希少な哺乳類、中城城跡周辺の鍾乳洞にはリュウキュウコビナガコウモリやオキナワコキクガシラコウモリなどの洞穴生物が生息している。テーマ1「中城の歴史と自然」では、中城城跡を中心とした中城に関する史料、文学作品、絵画、希少昆虫の標本や写真等を展示し、テーマ2「暮らし・民俗」では琉球王国時代に農作物・人数など数量を数える際に使用された「わら算」や中城間切の神女よきやノロの祭祀・儀礼について書かれた「琉球国由来記集」、「中山盛茂・満関係資料」に含まれているノロ調査資料等、テーマ3「移民」では、県内有数の移民送出母村として知られる中城村の南米移民関係の写真、テーマ4「琉球大学と中城村」では、琉球大学の移転により変貌する中城村南上原集落の様子を写真で紹介し、また王国時代の中城村南上原の糸蒲の地にまつわる説話を収録する「遺老説伝」等を展示する。

「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つとして世界遺産に登録され、琉球王国の記憶を今に伝える中城城跡、移民送出母村そして北中城村に続く長寿村として知られる中城村、その奥深い歴史と文化そして希少動物や昆虫の生息する自然について、ぜひこの機会に多くの皆さんにさらに知識を深め親しんでいただきたい。

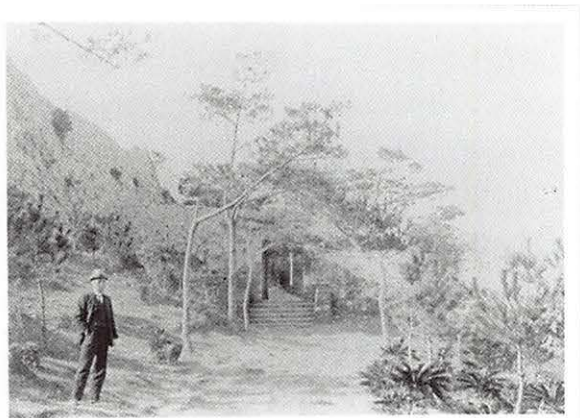
#### 凡例

1. 本書は、令和元年11月1日（金）～11月18日（月）まで中城村護佐丸歴史資料図書館にて開催される令和元年度琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展「いまとむかしの中城～琉球大学資料にみる自然・文化・人～」の展示資料解説（パンフレット）である。
2. 特に所蔵の明記がない資料については琉球大学の所蔵資料である。
3. 展示資料には本書に掲載していないものがある。
4. 本書の編集は、琉球大学附属図書館が担当した。

# 1. 中城の歴史と自然

テーマ1は、中城城跡を中心とした「中城の歴史と自然」をテーマとしている。14世紀後半に築城されたといわれる中城城は、15世紀中ごろ護佐丸ごさまるによって当時最高の築城技術をもって拡張され現在の城跡の規模となった。護佐丸・阿麻和利あまわりの乱以後、首里王府の直轄領となった中城城には1729年に間切番所まぎりばんじよが置かれ、戦前には中城村役場や小学校、戦後になると公園や動物園、そして現在の世界遺産とその時代ごとに姿を替えながら中城村の時代の移り替わりを高台から眺めてきた。これまで、中城城跡はいったいどのような中城の歴史や風景を見てきたのだろう。ここでは、中城城跡が眺めてきた中城の歴史や自然について、中城や護佐丸の歴史に関する史料、文学作品、絵画、写真、そして昆虫標本から見ていきたい。

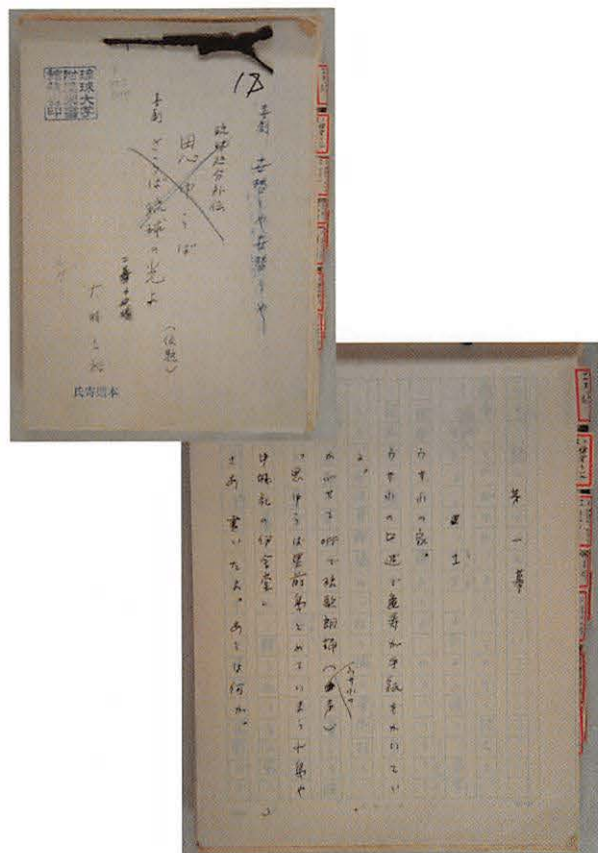
(前田 勇樹)



明治期中城城跡 (明治期琉球写真帳)



大正期中城城跡 (BULL 文庫)



## おおしろたつひろ 大城立裕原稿 「世替わりや世替わりや」

中城村出身の作家大城立裕おおしろたつひろによる、琉球処分真ただ中の中城を舞台にした戯曲(喜劇)。第二十二回紀伊國屋演劇賞(特別賞)受賞。

1963年にテレビドラマの台本として書かれた「思うむゆらば」と、その2年後に創作された「俺はちくどうん筑登之」を合わせて一つにまとめたのが「世替わりや世替わりや」である。「思ゆらば」の創作にあたって大城自身が、琉球処分の時に「こういう喜劇的な風景があったはずですよ」と言うように、首里士族で中城間切地頭の奥間親方とその次男おくまうえーかた樽金たるかね、地頭代の大門の主とその長男かみじやー龜寿かみじやー たんぼうにん、探訪人の謝花まえしろちくどうん、都落ちした寄留士族の真栄城筑登之とその娘マヅルなど中城を舞台に様々な身分や性別、立場から「世替わり」の混沌とした状況が描かれている。

(前田 勇樹)

## 中城村の自然

中城村は、開発が進む沖縄本島の中南部にありながら、美しい中城湾とそれを取り巻くように連なる丘陵地に囲まれた自然豊かな地域です。この丘陵地のおもな地質は、今から数百万年前に海に堆積してできた方言でクチャと呼ばれる泥岩層が隆起したものです。泥岩層は雨に浸食されやすいため、丘陵部の東斜面では幾度も崩壊が繰り返され、そのたびに流出した土壌によって海岸部に広がる平らな低地が形成されました。低地に堆積した風化土壌は方言でジャーガルとよばれる養分に富んだ肥沃な土壌であったため、低地部では昔から水田や畑が作られてきました。

一方、丘陵地帯には、ヤブニッケイ、ホルトノキ、クロヨナ、アカギなどの樹木が茂る自然林が残されており、林の周辺にはアリモリソウやリュウキュウコザクラ（写真1）、オキナワチドリなどの在来の可憐な草花も生育しています。また森の中には、オリイオオコウモリ（写真2）やワタセジネズミなどの希少な哺乳類をはじめ、都市部では見かけることが少なくなったヘビやカエルなどの様々な生物が生息しています。特に昆虫類は豊富で、子供たちが大好きなリュウキュウノコギリクワガタやオキナワヒラタクワガタのほか、チョウやトンボ、ホタルの仲間なども多く見られます。30年ほど前までは中城城跡裏の林の中では、冬になると数百匹ものオオゴマダラやアサギマダラが木々の間に垂れ下がるツルにとまって越冬する姿が観察できました（写真3）。残念ながら、今では周辺の開発が進みチョウの数も少なくなり、このような大規模な越冬集団は見られなくなりました。また、新垣や中城城跡周辺には、今から数十万年年前のサンゴ礁の堆積物からなる琉球石灰岩層が部分的に露出しています。琉球石灰岩層は、雨によって浸食され鍾乳洞が形成されやすい地層です。そのため、中城城跡周辺にはいくつかの鍾乳洞があり、リュウキュウユビナガコウモリやオキナワコキクガシラコウモリなどの希少な洞穴生物が生息しています（写真4）。中城村の自然環境は、都市部にある貴重な自然であり大切に守っていく必要があります。（佐々木 健志）



写真1. リュウキュウコザクラ



写真2. オリイ  
オオコウモリ

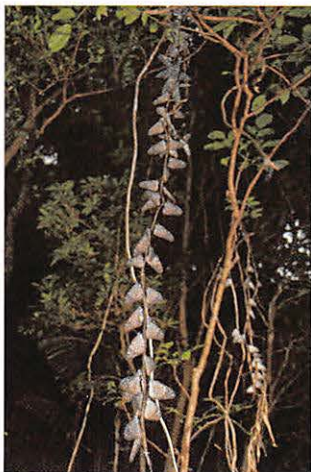


写真3. リュウキュウ  
アサギマダラの越冬

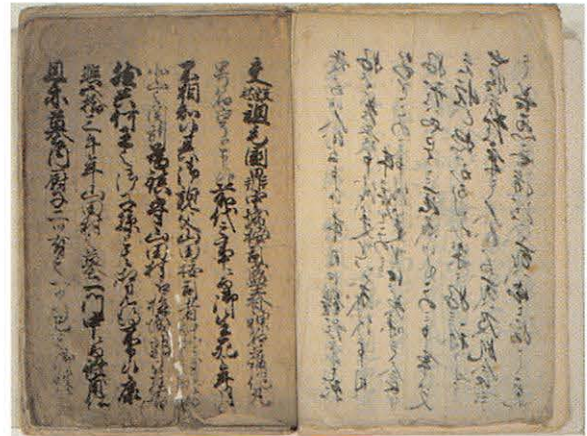
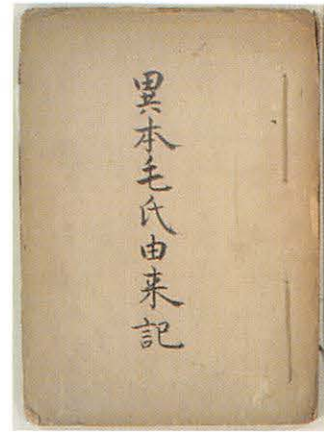


写真4. リュウキュウユビナガコウモリ

# いほんもううじゆらいき 異本毛氏由来記

いはふゆう  
伊波普猷文庫

成立年代不明。主として護佐丸ごさまるについて述べられた毛氏もうじの先祖由来記である。初めに先祖の山田按司やまだあじの墓の修築について述べられ、その後、護佐丸の伝記となり、いわゆる「護佐丸・阿麻和利あまわりの変」を中心に話が展開していく。戦の末、末子の盛親しょうしんを残して、親類に至るまで自害したということ、盛親が尚円王代に役人として登用され、尚真王代には紫冠しかんを頂戴し、とみぐすくまざりとみぐすくまざり せうじどうせうじどう 豊見城間切の惣地頭職に就いたことなど、子孫の繁栄を伝える内容となっている。先祖については家譜に大略が記されているものの、詳しくはなく、永代に伝えるために高江洲筑登之親雲上たかえすちくどうんべーちん、毛姓大城筑登之親雲上ちゆうざんせいふらが『中山世譜』、『琉球国旧記』、『琉球国由来記』、系図などを参考に書き記したことが記されている。(前田 勇樹)

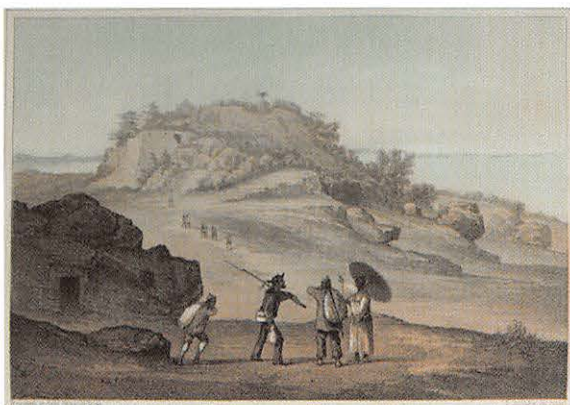


## ペリー提督日本遠征記

日本との条約締結を目的としたペリー提督率いるアメリカ艦隊の航海日記(全3巻)で、1856年から第1巻より順次出版された。第1巻が本記、第2・3巻は付録で、第2巻は自然科学および各種の報告、第3巻は天文学上の観測路図となっている。第1巻25章のうち7章が琉球の記述に充てられている。第7～11章では、最初の琉球訪問の際の島内探検調査、首里城訪問、琉球社会の観察などが記録されている。第15章では江戸からの帰途訪れた琉球での貯炭庫の確保、米兵の自由行動などの交渉について、また第25章では条約締結後のボード事件や琉米修好条約の事情について記されている。さらに、琉球の産業・医学・地誌などの5編の報告(第2巻)や、琉球の風物・人物に関する大小48点の挿絵があり、きわめて貴重な資料だといえる。1853年5月30日～6月4日まで島内探検調査に出かけたペリー一行は、5月31日に中城の「バナー・ロック」(旗立岩)や中城城に立ち寄り、その様子を4枚の絵画に残した。(前田 勇樹)



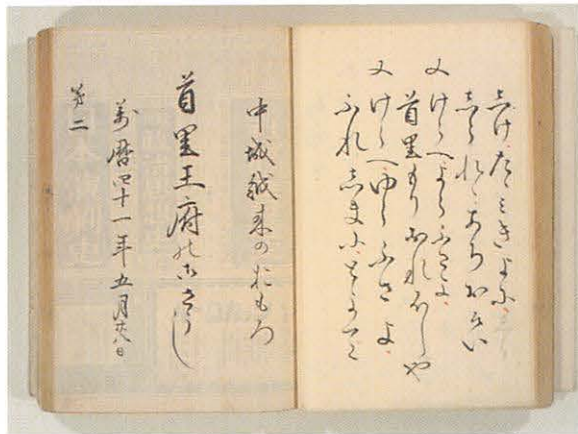
「バナー・ロック」(旗立岩)



中城

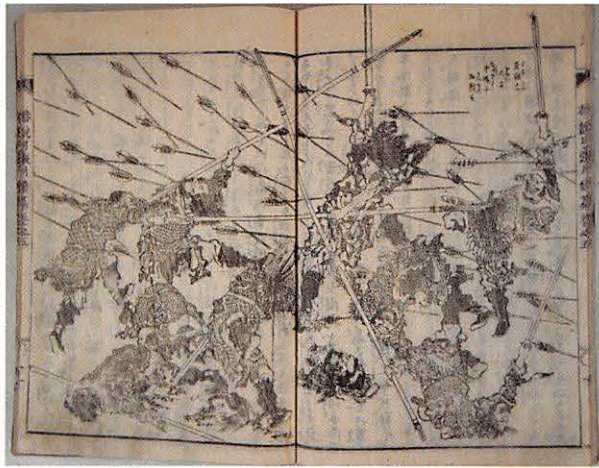
# おもろさうし (仲吉本)

伊波普猷文庫



奄美・沖縄諸島に伝わった儀礼歌謡「おもろ」を、1531年から1623年にかけて首里王府が編纂し、歌謡集としたもの。全22巻、1554首のおもろを収録している。原本は一度焼失したため、1710年に再編された(二部)。それが尚家と安仁屋家(おもろ主取家)に渡り、現在の尚家本系統・安仁屋本系統に別れて伝わっている。仲吉本は仲吉朝助が所有していた安仁屋本系統の写本である。巻2は、「中城越来のおもろ 首里王府の御さうし 万暦四十一年五月廿八日」という巻名で、中城を詠んだ歌は29首、越来については17首、計46首が収められている。(久貝 典子)

# ちんせつゆみはりづき 椿説弓張月



「査国吉おおいに中城に血戦す」の図

滝沢馬琴作、葛飾北斎画の読本。19世紀初頭成立。前編6冊・後編6冊・続編6冊・拾遺6冊・残編6冊の全30冊。九州平定・伊豆七島統治から琉球渡りまでを描いた源為朝一代の武勇伝。前半に弓の名手である源為朝の活躍を描き、後半では保元の乱に破れた為朝が伊豆大島から琉球へ渡り、その国の内乱をおさめて王国を再建するまでを描いている。とくに中城と関わる内容としては、続編において中城を治めていた忠義者の毛国鼎が謀殺され、毛国鼎の妻新垣は二人の息子(鶴・亀)と逃げる途中、阿公によって殺される。その後、逃げ延びた毛国鼎の遺児鶴と亀は為朝と共に奸臣利勇を討ち、阿公への仇討を成し遂げる。(前田 勇樹)

# おんがぼん おろくどうんぼんくみおどりしゅう 恩河本「小禄御殿本組踊集」

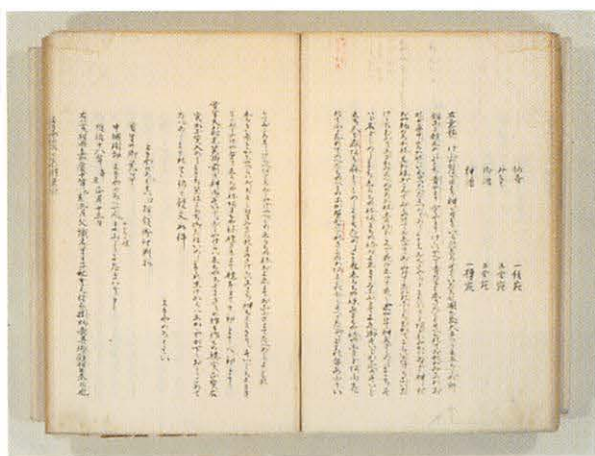


恩河朝祐が1898(明治31)年に書写した組踊集。22演目の組踊台本を所収している。組踊台本「小禄御殿本」は、伊波普猷が『校註琉球戯曲集』を編纂した時に参考にした組踊台本で、首里王府の由緒ある組踊台本である。収録組踊は、「巡見の官」「義臣物語」「孝行の巻」「護佐丸敵討」「執心鐘入」「大川敵討」「銘苅子」「姉妹敵討」「久志の若按司敵討」「万歳敵討」「大城崩」「女物狂」「忠臣身替の巻」「花売の縁」「東辺名夜討」「北山之若按司敵討」「二山和睦」「孝女布晒」「雪払(二種類)」「手水の縁」「本部大腹」「屋慶名大主敵討」。中城若松を主人公にした「執心鐘入」は、今年で上演300周年を迎え、現在でも最も人気のある組踊である。(崎原 綾乃)

## 2. くらし・民俗

中城村の人々は、琉球王国時代から、農作物を作り、豊作を神へ感謝し、国へ税を納め、芸能を守り伝えて暮らしてきた。テーマ2では、くらしを中心に展示を構成した。税金を納める時や農作物、人数など数量を数えるときに使われたわら算は、琉球では戦後はほとんど見られなくなった習俗である。中城のよきやノロは、五穀豊穡や航海安全などを神に祈るのが仕事であるが、その記録として「よきやのろくもい伝来記」を紹介する。島袋ノロの調査記録もあわせて展示し、王国時代から現代へ続く祈りの心に迫りたい。また琉球の風俗を描いた絵巻物『沖繩風物』を展示した。本テーマでは、中城城下に広がる古き良き伝統的なくらしを紹介したい。

(崎原 綾乃)



### りゅうきゅうこくゆらいきしゅう 琉球国由来記集

伊波普猷文庫

本書は琉球国の各間切の史料から書き写されたものである。成立年不明。中城間切の神女よきやノロの祭祀・儀礼について書かれた、「よきやのろくもい伝来記」が所収されている。ほかに「渡嘉敷間切由来記」、「久高島由来記」、「御養父ノ由緒」、「(兪)氏系図抜書」、「神歌主取家元祖由来記」、「おもろ主取日記抜書」、「絃歌之由来」を収める。

(崎原 綾乃)

### おきなわふうぶつ 沖繩風物

かたえぞめさつか せりざわけいすけ  
型絵染作家・芹沢銈介（重要無形文化財保持者）作。もとは型染絵本として頒布したものを、巻き物としてひとつにまとめた作品である。全9枚、1948年、和紙製。

作者の芹沢は、1939（昭和14）年日本民藝協会同人の一人として初めて来沖。那覇の市場や首里周辺、久米島などを観光した。本作品は、その時の印象を描いたもので、明るい色彩や、図案家としての美しい空間構成が特徴的な作品である。

(久貝 典子)



那覇大市



かたちきや一  
形附屋

## 中城村のわらざん藁算

沖縄には琉球王国時代から明治の中頃まで、文字を使えなかった庶民が、稲藁などを結んで数の記録や伝達、計算器などとして用いた「藁算」と呼ばれる民具があります。藁算のように紐や縄を結んで記録や伝達などを行う道具を「結縄けつじょう」と言います。文字が社会に普及する以前は、世界の様々な地域で結縄が利用されていました。まだ藁算が残る明治期に沖縄を訪れた民俗学者の「田代安定たしろあんてい」は、沖縄本島や宮古島などから250点を超える藁算標本を収集しました。その詳細な内容は、『沖縄結縄考』という本にまとめられており、現在、藁算を研究する上で最も重要な資料となっています。

この『沖縄結縄考』には、明治期の中城間切で収集された藁算が40点も紹介されています。収集地も、當間、伊舎堂、伊集、和宇慶、泊、久場、新垣、奥間、津覇、安谷屋、熱田、大城、荻道、喜舎場、島袋、瑞慶覧、比嘉、和仁屋など、現在の中城村と北中城村のほぼ全域に及んでおり、当時の中城間切では藁算が日常的に使われていたことが伺えます。収集された標本には、ある年の集落の戸数の記録（當間）、砂糖量の記録（津覇など）、麦の量の記録（泊など）などのほか、最も多いのが金額を記録した藁算（熱田など）でした（写真1・2・3・4）。今回の企画展では、田代安定の資料をもとに復元した中城村で収集された藁算を展示します。現在、琉球大学博物館では各地域に残る藁算の資料の調査と収集を行っています。中城村では明治期の藁算の記録が多数あるにもかかわらず、今のところ藁算についての情報がありません。中城村の藁算について情報をお持ちの方は、ぜひ当館までご一報頂ければ幸いです。

（佐々木 健志）



写真1. 集落の戸数を記録した藁算（甲組；49戸，乙組；43個）・中城間切 當間

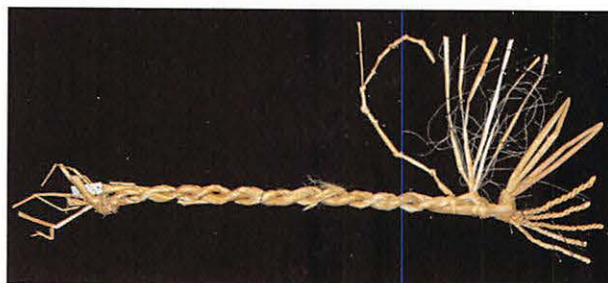


写真2. 砂糖の量を記録した藁算（砂糖；526挺5分5厘）・中城間切 津覇

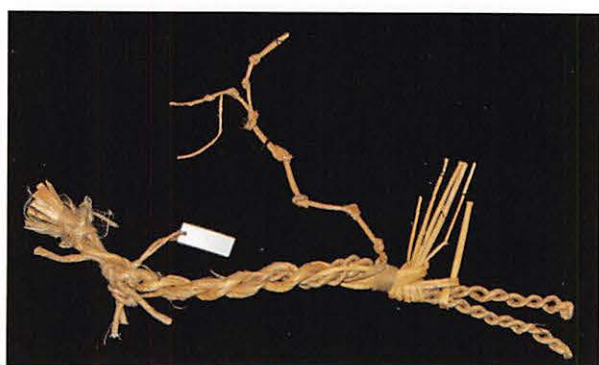


写真3. 麦の量を記録した藁算（麦；2石1斗5升5合4勺）・中城間切 泊

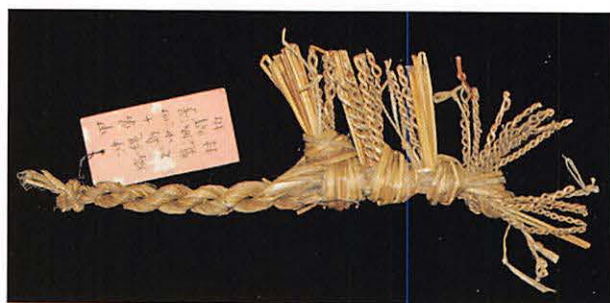


写真4. 銭高を記録した藁算（銭；15915貫550文）・中城間切 熱田

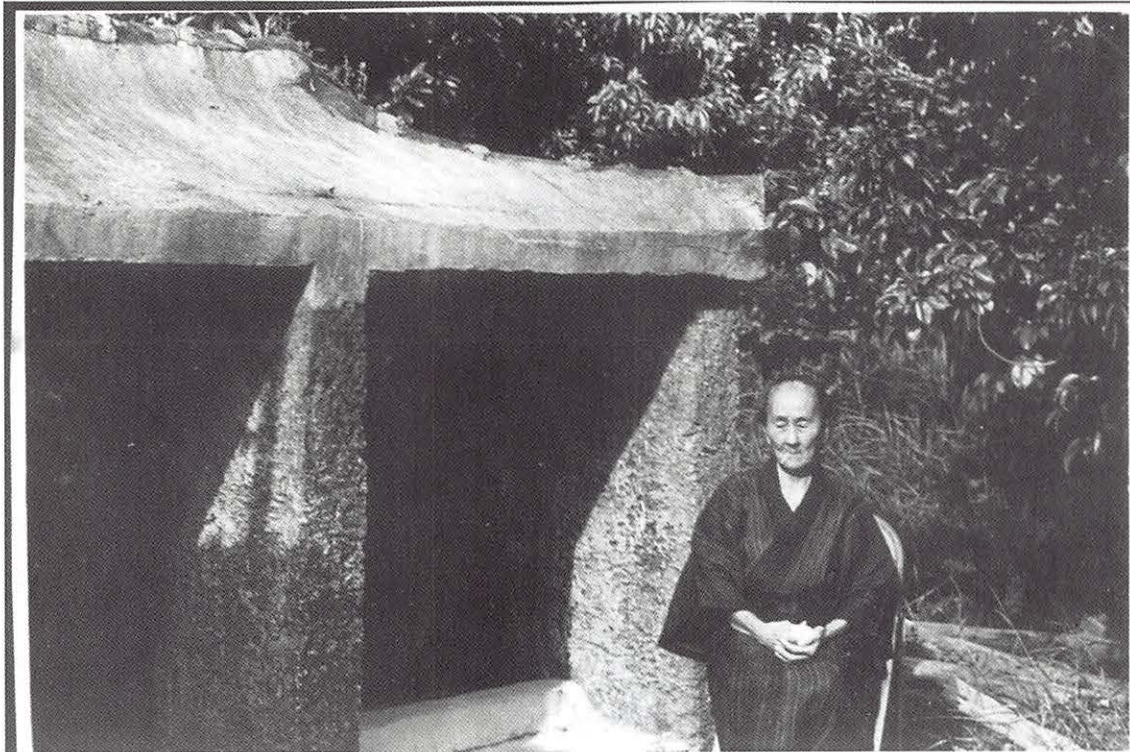


## ノロ調査記録写真

なかやませいも  
中山盛茂・満関係資料より

ノロ調査資料は、琉球大学附属図書館所蔵「中山盛茂・満関係資料」に含まれており、1960年頃の沖縄県内の祭祀やノロに関する研究資料である。中山盛茂・満関係資料は、ノロや民俗史の研究で活躍した中山盛茂氏の資料と移民研究者の中山満氏の資料である。

ノロ資料のなかには、北中城村の島袋ノロの墓や御嶽、旧比嘉集落の殿<sup>どうん</sup>の写真などがある。現在ではもう調査できない貴重な記録となっている。(崎原 綾乃)



1. 島袋ノロ(1960年)



2. 島袋ノロの墓 (1960年)



3. 島袋ノロの曲玉<sup>まがたま</sup>(1960年)

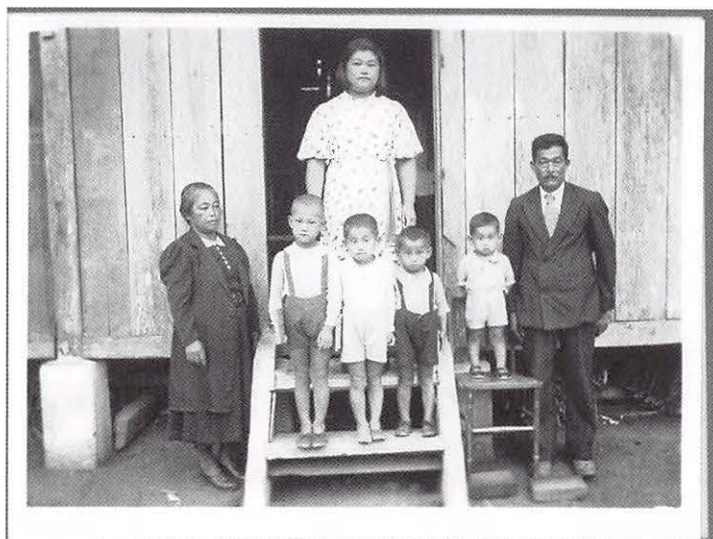
### 3. 移民

沖縄は海外への「移民（海外へ移住した人々）」が多い県である。沖縄県の移民は、明治・大正・昭和の各時代に北米・中南米・アジアへと成功を夢みて渡っていった。中城村は県内有数の移民送出母村であるが、移住を希望した主因は貧困からの脱却である。しかし沖縄戦後は米軍に土地を接収されたことによる貧困も新たに発生し、その対応策として渡海した家族もあった。これらの写真では、「モーキティクーヨー（儲けて来いよ）」の重い言葉を背に海外へ移住した人々の、ある種の決意が感じられる。テーマ3では、琉球大学附属図書館所蔵の移民写真資料より、ブラジル移民とボリビア移民を紹介する。

（久貝 典子）

#### ブラジル移民 栗原自然科学研究所歴史調査班『在伯日本移民歴史調査写真帳』より

栗原自然科学研究所は、日本移民の開拓が現地の自然・考古学的遺跡遺物の損壊をもたらすことについて調査の必要性があるという理由から、1931（昭和6）年9月サンパウロ州アリアンサ移住地内で設立された。同研究所はいくつかの日本人植民地で1941（昭和16）年まで調査を実施しているが、それは学術調査のほか、マラリア発症などに関する情報を得るという一面もあったようである。



比嘉 牛家（中城村出身）

第1回の農業契約移民（総数781名）の一員として笠戸丸に乗船し、ブラジルへ渡った家族。一家は1908（明治41）年4月28日神戸を出港、同年6月18日サントス港へ着港した。入植先はアンナディアス（現在のサンパウロ市アンナディアス）であった。



喜屋武 次郎家（中城村出身）

農業契約移民として若狭丸に乗船して渡った家族。1918（大正7）年12月28日、サントス港へ到着した。同家もアンナディアスへ入植した。

## ボリビア移民



### 移民列車の車中

那覇港からサントス港(ブラジル)へ着いた移民団は、列車に乗り、中継点のサンタ・クルス駅へ向かった。写真解説に「移民列車、車中風景。十日から二週間、寝ても起きてても木製ベンチ半分が一人の領分だった」とある。



### リオ・グランデを渡る移民団

「サンタ・クルス号」という渡し船に乗ってリオ・グランデ川を渡る移民。リオ・グランデ川は、南米諸国の幾つかの国の国境となる川である。解説に「リヨ・グランデをドロ舟で渡る移民団」とあり、川を渡るには常に危険が伴っていた様子がわかる。



### 移民列車の旅行風景

戦後の移民は1948(昭和23)年より再開するが、移民数は瞬く間に増え、1954(昭和29)年には400人を超える人々がボリビアへと渡っていった。同年以降は、琉球政府によってサンタクルス州への自営開拓移住を目的とした計画移民が行われた。

移民団はブラジルのサントス港へ着くと、列車でボリビアへ移動した。写真は移民列車の一コマ。解説に「移民列車が停車するわずかな時間を利用して、手持ちのお米でメシをたいたり味噌汁を炊いたりして旅をつづけました」とある。

### サンタ・クルス到着

同駅はボリビア第二の都市サンタ・クルス市に位置するボリビア鉄道の主要駅である。解説には「やっとボリビア、サンタ・クルス市へたどり着いた移民団」と記されている。ここからリオ・グランデ川を渡って目的地のコロニア・オキナワへ移動した。



## 4. 琉球大学と中城村

琉球大学千原キャンパスは、西原町、宜野湾市と中城村の接点地域に1979（昭和54）年に移転している。現在、琉球大学の敷地の一部となっている中城村南上原集落には、近世琉球において、首里王府が管理する<sup>そまやま</sup> 杣山（官有林）があった。集落の丘陵沿いには、首里から中城グスクに通じる、ハンタ道と称される道が通っており、現在では「歴史の道」として整備がされている。

起伏にとんだ地形を利用して、1943（昭和18）年頃からは日本軍の陣地構築が南上原集落において行われていたようであり、糸蒲<sup>いとかま</sup> 一帯や現在の琉球大学工学部北側の丘陵地等が日本軍陣地となっていた。

戦後、首里城跡地に開学した琉球大学は、1966（昭和41）年に、現在地にキャンパスを移転することになった。1975（昭和50）年以降に移転整備工事が始まった。整備が進むにつれ、周辺道路の整備やバス路線の新設等によって中城村南上原集落は変化していった。本テーマでは、戦前から戦後、そして昭和50年以降の琉球大学の移転によって変化していく中城村南上原について写真資料を中心に紹介していく。（冨田 千夏）

### いろいろせつでん 遺老説伝

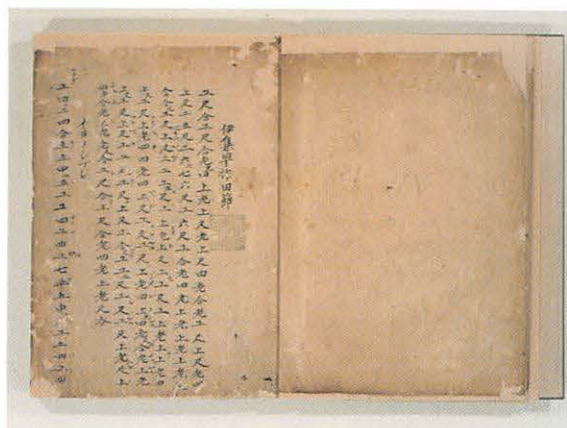
伊波普猷文庫



説話集。琉球国の正史『球陽』の付巻として1745年成立。鄭秉哲等編。本来4冊だが第3巻1冊を欠いている。尚家本『遺老説伝』に近いが「三司官之印」の朱印が認められ、尚家本の上位の写本にあたる。『遺老説伝』は、『球陽』本編には収められない古老の伝説を集めたという意で、141話が収められている。巻1では、中城村南上原の糸蒲の地にまつわる、田芋や糸蒲寺に関する説話が収録されている。（琉球大学附属図書館）

### やかびくんくんしー 屋嘉比工工四 <沖縄県指定有形文化財>

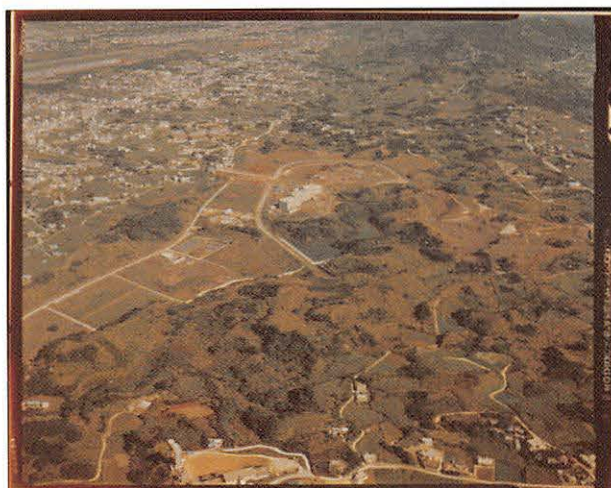
伊波普猷文庫



やかびちようき  
屋嘉比朝寄（1716～1775）が編んだ琉球古典音楽の楽譜。117曲を収録。屋嘉比は中国の楽譜を参考に三線の記譜法（工工四）を考案し、それまで口承で伝えられてきた琉球音楽を集成した。本書はその原本。三線の旋律符号を列記したそばに、歌詞をカタカナで付記し、三線を伴奏にして弾き歌いできるような方法がとられている。<書き流し工工四>とも言われる。真境名安興から伊波普猷に渡り、琉球大学附属図書館に収められた。（琉球大学附属図書館）



1978（昭和53）年9月頃：農学部が建設中。左手側が中城村。



1979（昭和54）年10月頃：農学部が建設され、理学部・共通教育棟付近の土地が造成中。



1979年12月頃：手前の造成部分が上原キャンパス（琉大病院及び医学部）。奥の方に見えるのが千原キャンパス。右上が中城湾。



1990（平成2）年12月：手前が上原キャンパス。奥の方に見えるのが千原キャンパス。

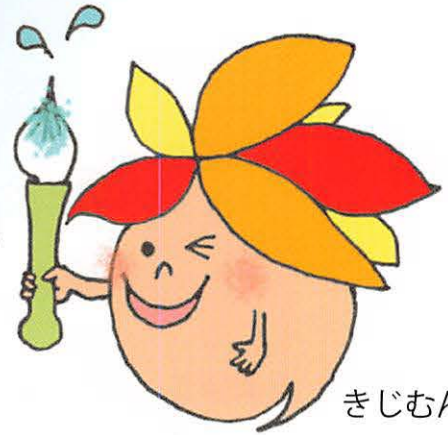
※本ページの写真はすべて琉球大学総務部総務課（大学史資料室）提供

# きじむん・こがじい

## のクイズラリー

スタート!

てんじぶつ  
展示物をみながら  
チャレンジ!



せかいいさん      なかくすく      しろ  
1. 世界遺産にもなっている中城にある城あとは  
なん  
何というでしょうか。



- ① なかくすくじょうあと  
中城城跡
- ② しゅりぐすく  
首里城
- ③ なきじんじょうあと  
今帰仁城跡

なかくすく      しょうにゅうどう      す  
2. 中城の鍾乳洞に住んでいるこ  
どうぶつ      なまえ      なん  
の動物の名前は何かというでしょ  
うか。



- ① リュウキュウユビナガコウモリ
- ② ゴサマルユビナガコウモリ
- ③ ユビナガバットマン

ほうさく      こうかいあんぜん      かみ      しごと  
3. 豊作や航海安全などを神にいのる仕事  
じよせい      なん  
をした女性を何というでしょうか。



- ① ボロ
- ② ノロ
- ③ トトロ

かね かいがい す ひとたち  
5. お金をかせぐために、海外へうつり住んだ人達  
なん  
を何というでしょうか。

- ① 移民
- ② 旅行者
- ③ 冒険隊



さんしん がくふ なん  
6. これは三線の楽譜です。何とい  
うでしょうか。



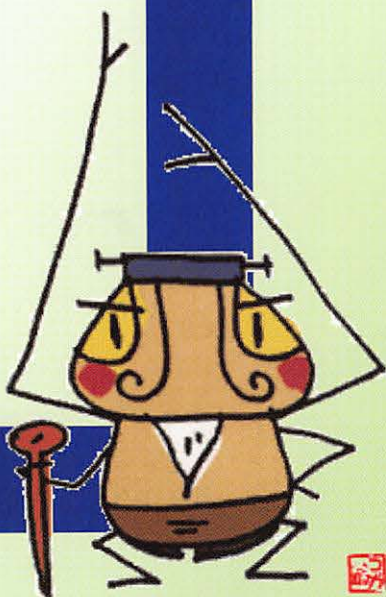
- ① クンクンシー
- ② トントンミー
- ③ ケンケンパー

なかぐすくそんいじゅ でんとうげいのう なん  
4. 中城村伊集の伝統芸能は何というでしょうか。



- ① タンナファクルー
- ② ターファークー
- ③ パーランクー

ゴール！



こがじい

スタンプをおしてね！

保護者の方へ：答えはこの冊子のどこかにあります。

令和元年度琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展  
いとむかしの中城～琉球大学資料にみる自然・文化・人～

主催：琉球大学附属図書館 琉球大学博物館（風樹館）  
共催：中城村教育委員会 中城村護佐丸歴史資料図書館  
後援：中城村  
期間：令和元年11月1日（金）～18日（月）  
企画：琉球大学附属図書館研究開発室

川本康博（附属図書館長・農学部教授）

豊見山和行（人文社会学部教授）

里井洋一（教育学部教授）

前城淳子（人文社会学部准教授）

金城ひろみ（人文社会学部准教授）

當山奈那（人文社会学部准教授）

仲間伸恵（教育学部准教授）

佐々木健志（博物館助教）

赤嶺守（琉球大学名誉教授・名桜大学大学院教授）

スタッフ：琉球大学附属図書館情報サービス課保存公開係

富田千夏 崎原綾乃 久貝典子

林あんり 前田勇樹 水野陽

琉球大学博物館（風樹館）

佐々木健志 島袋美由紀

協力：中城村護佐丸歴史資料図書館

中城村教育委員会生涯学習課文化係

琉球大学総務部総務課（大学史資料室）

那覇市歴史博物館

印刷：東洋企画印刷

発行日：令和元年11月1日

問合せ：琉球大学附属図書館情報サービス課 E-mail:tsokinawa@acs.u-ryukyu.ac.jp

琉球大学附属図書館ホームページ <http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/>